

魔法のWallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：植田 泰子 所属：北九州市立小倉総合特別支援学校 記録日：令和2年2月28日

キーワード：コミュニケーション、表現、要求表出、見通し、自己選択、ストレス、視覚支援、注意喚起

【対象児童の情報】

○学年 小学部5年生

○障害名 ・重度重複障害 ・肢体不自由 ・知的障害 ・広汎性発達障害

○障害の困難の内容

- ・ 下肢に麻痺があり、自由に動くことに制限がある。
- ・ 発声や指差しでコミュニケーションを行っている。
- ・ 要求が叶わなかったり不満に思うことがあったりすると他傷することがある。
- ・ 興味や関心がない時に自己刺激行動をする。



【活動目的】

- ・ 活動のねらい

☆対象児童が安心して授業や学校生活に取り組める環境を作りたい！

そのために、「伝わり」「伝える」相互のコミュニケーションを目指し、

- ① 教師→Fくん 教師から「伝わる」方法を増やす。
- ② Fくん→教師 要求の幅を増やし、適切な方法で周りの人に伝える方法を身に付ける。

- ・ 実施期間：令和元年5月13日～令和2年2月28日
- ・ 実施者：学年の担任教師（9名）
- ・ 実施者と対象児の関係：担任

【活動内容と対象児童の変化】

（ア）対象児童の事前の状況

（1）活動のねらい① 教師→Fくん 教師から「伝わる」方法を増やす に関する対象児童の事前の状況

【教師からの言葉かけで対象児童が分かる言葉やサイン、シンボルについて】

（表1）教師の指示に対しての児童の行動について

| 状況 | 状況 | 教師の言葉かけ | 児童の行動 | 伝わる○伝わらない× |
|--------|----------------|-----------|-------------|------------|
| 朝の準備 | 服が目の前にある | 「着替えて」 | 服を取って着ようとする | ○ |
| | 靴が近くにある | 「靴履いて」 | 靴を取って履こうとする | ○ |
| 車椅子で移動 | 止まって順番を待つ | 「ブレーキして」 | ブレーキをかける | ○ |
| | トイレの前まで行く | 「ブレーキして」 | ベルトを外そうとする | × |
| 手洗い | ハンカチが目の前にある | 「手を拭いて」 | ハンカチで手を拭く | ○ |
| 給食 | 給食、おしぼりが目の前にある | 「手を拭いて」 | おしぼりで口を拭く | × |
| | | 「口を拭いて」 | おしぼりで口を拭く | ○ |
| 昼休み | 絵本が机にある | 「片付けて」 | 箱にしまう | ○ |
| | 好きなボールが目の前にある | 「いる？」 | 返事をする | ○ |
| | 好きなボールが目の前にある | 「いない？」 | 返事をしない | ○ |
| 日常生活 | 帽子を自分で持っている | 「帽子かぶって」 | 帽子をかぶる | ○ |
| | 車椅子に乗る途中 | 「ちゃんと座って」 | お尻を上げて座り直す | ○ |
| | マットで座位をとる | 「ちゃんと座って」 | | × |

【気付いたこと、児童の様子】

※同じ声かけでも指示どおりに行動できるものとできないものがあった。

- ① 車椅子での移動時は「ブレーキして」と声かけるとブレーキをするが、トイレに行った時は「ブレーキして」と声をかけるとベルトを外すことがある。(トイレに行く時に車椅子から降りるので、その流れで行動をしているのかと推察できる。)
- ② トイレ後は「手を拭いて」と教師が声をかけるとハンカチで手を拭くが、給食の時に「手を拭いて」と声をかけると口を拭く動作をすることがある。(給食中は口を拭くこと状況が多いことによると推察できる。)
→言葉をきっかけにして、実物や状況の流れで判断していることがある。

【言葉の理解について考察】

・教師の言葉かけで、実物やイラストに対しては指差しができるものは多い。しかし、日常のコミュニケーションの中のやり取りでは**確実に伝わっていなかったり、流れのみで理解しているものが多い。教師の言葉を注意喚起にして動作や活動を理解している**ようである。

→言語だけのコミュニケーションだと、教師の意図が伝わっていないものが多く、不十分である。

【教師から対象児童に伝わる声かけや関わり方について】

- ・個別での自立活動の机上学習

課題をかごに入れ、課題の内容と勉強の終わりに好きなおもちゃができると見通しボードを使っている。課題が終わると勉強カードをかごに張り付け、次の課題に手を伸ばし取り組むことができる。授業の見通しと内容が対象児童にとって理解できるときは、拒否をすることなく取り組める。

→やることが明確に見えると学習に参加できる時間が長い。



(2) 活動のねらい② **Fくん**→**教師** 要求の幅を増やし、適切な方法で周りの人に伝える方法を身に付ける に関連する対象児童の事前の状況

対象児童の周りの人との関わり方について、学校での様子をそれぞれ iPad の「カメラ」にてビデオで記録した上で、その時の行動の前後の状況や周りの人の関わりの様子を分析した。



(表2) 対象児童の授業中における事前の実態 (6月6日の記録)

(朝の会、一斉)

| 状況 | 状況 | 児童の行動 | 教師の行動 | 後の児童の行動 |
|----------------------------|-------------------|-------------------|-----------------------|----------------|
| 一斉授業 児童8人~10人 車椅子で固定 | 朝の歌を歌う | 手をたたく 背中を打ち付ける | 一緒に拍手をしようと する | つねる |
| | 自分の名前の順番が近 くなる | 笑顔になる | 児童の名前を呼ぶ | 手を挙げて返事をす る |
| | 友達の発表を聞く | 身体を揺らす | 教師が手を出す | つねる |
| | 音楽が流れる | 手をたたく | 手話を一緒にしようと 教師が手を持つ | つねる 怒った顔になる |

(自立活動、個別)

| 状況 | 状況 | 児童の行動 | 教師の行動 | 後の児童の行動 |
|---------------|-----------------|--------------------|------------------|------------|
| 個別 マットで仰臥位 | ストレッチ体操をする | 力を抜いてリラックス している | 足や腕のストレッチを する | 指示に従って手を出す |
| 個別 車椅子に天板 | 課題に集中して取り組 む | 集中力が切れて、机に 手を叩く | 教師が課題を渡す | つねる |

(昼休み、個別)

| 状況 | 状況 | 児童の行動 | 教師の行動 | 後の児童の行動 |
|----------|----------|------------------------|------------------|----------|
| 個別 机上 | 絵本が近くにない | iPadで「せんせー」「ポニョの絵本」と要求 | 教師が近くに来て絵本を取って渡す | 静かに絵本を読む |

【実態や状況を整理】

- 昼休みで、ドロップトークを使って絵本やおもちゃを要求し、自由な時間を過ごしている時は、つねったり引っかいたりする行動はほとんど見られなかった。
- iPadのドロップトークのアプリを使って要求ができるが、使える場面が昼休みや自由時間のみである。
- 朝の会や学級活動等の一斉授業の時につねることが多い。個別での指導や授業の時は少ない。
- 一斉授業では、車椅子を固定してあり、制限が多い状況である。授業の中で要求をすることはなく、授業に参加をせず自己刺激行動をしていることが多い。



(写真) 怒った顔で教師をつねる

⇒ 嫌なことや拒否をしたい時の表現が「つねる」ことになっており、伝える手段がない場面が多い。

(イ) 活動の具体的内容

実践① 教師から「伝える」方法を増やす。

事前の状況の考察から、言語だけでのコミュニケーションでは不十分であり、対象児童に合った環境調整が必要である。

【教師の発信方法の見える化の取組】

① スケジュールボード

写真やイラストで理解や見通しがもてることから、スケジュールボードを使って一日の流れが分かるようにした。カードはマジックテープで取り付け、終わると対象児童が自分ではがすようにする。



② タイムタイマー

タイムタイマーを使って、活動の終わりが分かりやすいようにした。机の見えるところに掲示し、タイマーが鳴ったら活動の終わりを知らせるようにする。

→ 持ち運びや携帯がしやすいiPadも並行して使用する。

「絵カードタイマー」



③ 場所カード

ウォーカーを使って歩行の練習の時に次にどこに行くのかを掲示する。

→ 写真が多くなったため、カメラで撮ってすぐ使えるiPadに移行し、整理して提示する。

「ドロップトーク」



実践② 要求の幅を増やし、適切な方法で周りの人に伝える方法を身に付ける。

実践②—①要求の幅を増やす取組

・コミュニケーションボード

コミュニケーションボードを車椅子や机に取り付け、いつでも要求ができるようにした。



コミュニケーションボード



見えやすい机にボードを貼って要求がしやすいように

・Fくんタイムの導入

一斉授業の中で、コミュニケーションボードを使って要求をし、個別で休憩等を行う時間を「Fくんタイム」とし、学年教師の共通理解の中で行った。

・iPadの「ドロップトーク」のアプリを使って要求の幅を広げる

要求するものや要求する人を広げていくために、コミュニケーションボードの中身を入れ、さらにコンテンツを増やした。



コミュニケーションボードの中身をドロップトークへ

学年教師や友達の写真のシンボルも取り入れ、様々な人や場所でコミュニケーションが取れるようにした。Fくんが教師を呼んだ時は、Fくんのところに行き、関わったり要求を叶えたりするようにした。

実践②—②適切な方法で周りの人に伝える方法を身に付けるための取組

○コミュニケーションボードやiPadがないときの人との関わり方

- ・教師を呼びたい時の方法として、iPadのドロップトークで「せんせー！」をタップするか、教師に直接「トントン」と優しくたたき、などが身に付くようにする。
- ・つねる、引っかくなどの行動に対しては、なるべく反応しないようにする。一斉授業や制限のある状況の時は、人をつねらないように周りの人と距離を取るようになる。



(表3) 教師の関わり方と対応について

| 対象児童の行動 | 教師の反応 | その後の対応 | |
|---|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・iPadのドロップトークで「せんせー！」をタップ ・離れている教師に向かって手を挙げたり発声したりする | 対象児童の近くに行って「どうしたの？」と声をかける | <ul style="list-style-type: none"> ・iPadやカードを渡して要求ができるようにする ・要求に応じてコミュニケーションが取れるようにする | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・教師に直接「トントン」と優しくたたき | 「どうしたの？」と声をかける | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・指差しをしている ・教師の手を取りクレーン行動をする | 「トントンしてね」「せんせー！で呼んでね」など、正しい呼び方のモデルを教える。手本を示す。 | 「トントン」「せんせー」と正しい呼び方をやり直しをする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・iPadやカードを渡して要求ができるようにする。 ・要求に応じてコミュニケーションが取れるようにする。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・自己刺激行動をする | 離れた位置から声かけをする | 写真や動画、イラストやシンボルを見せて、授業の内容や教師の指示が分かるようにする。 | 落ち着かない場合はiPadやカードを渡して要求ができるようにする。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・つねる、引っかく | 反応しない | 対象児童と離れた距離で見守る | |

○対象児の事後の変化

実践① 教師から「伝える」方法を増やす。

① 一日のスケジュールボード

○2学期の様子

- ・教師がスケジュールボードを見せると、自分の好きな活動の「絵本」「DVD」のシンボルを指差すことが多かった。教師から「お茶」のシンボルを指差し水筒を提示すると、自分で蓋を開け水分を取るようになった。
- ・帰りの準備では、「ランドセル」「靴」「DVD」と並んでいるのを見せて確認した。「帰りの準備したらDVDを見よう！」と絵カードを見せながら教師が声かけすると、自分でランドセルに手を伸ばし片付けを始めた。



(写真) 終わったカードを缶に入れる

○3学期の様子

- ・「体温計」「ウォーカー」等の本人が好きではない活動の時、首を振って嫌だと表現することもあるが、カードを教師が指差しながら「体温計するよ」と教師が声をかけると、つねったり引っ掻いたりすることなく取り組むようになった。
 - ・午前の授業が終わると、「給食袋」「給食」のカードを見ると自分で給食袋に手を伸ばし、準備をしようとする姿が見られた。
- 今までは、「絵本」等の好きな活動を指差すことばかりだったが、見通しがもって行動するようになってきている。

② タイムタイマー

- ・DVDの自由時間の時は、タイムタイマーで時間を図った。「ピピピッ」と音が鳴り声かけすると、最初はそれを無視して続けようとしていた。教師が「片付けるよ！」と声かけをし、自分で片付けた時は賞賛をすることを続けた。
- 導入前は気持ちを切り替えられず怒ったり泣いたりすることが多かったが、タイマーが鳴り教師が声かけすると自分でディスクを取り出したりコードを抜いたりするようになった。



(写真) DVDを自分で片付ける

③ 場所カード

○2学期の様子

- ・ウォーカーに乗る前に、教師が場所カードを見せると「図書コーナー」「ブランコ」等の好きな場所を指差した。「スロープ」の写真を出し、「スロープ行っからブランコに行こう。」と教師が声をかけると、首を振って拒否をしたが、何回か話すと「あい」と返事をした。その後拒否することなくスロープの歩行に取り組むようになった。



(写真) 行く場所を確認する

○3学期の様子

- ・「ドロップトーク」のアプリの予定表機能を使い、行く場所を順番に掲示した。本人とやり取りをして順番を決めた。図書コーナーの近くに行っても、予定どりのスロープの方に行き、歩行に取り組んだ。
- ・歩いている途中で止まり、自分で袋からiPadを出し、「ブランコ」と指差して行きたい場所を伝える姿も見られた。



(写真) ドロップトークで掲示

実践②要求の幅を増やし、適切な方法で周りの人に伝える方法を身に付ける。

実践②—①要求の幅を増やす

○コミュニケーションボードを使って「Fくんタイム」の時間を取る

・コミュニケーションボードでやり取りして要求された物を渡すと、それを使ったり、その場所で落ち着いている様子が見られた。要求したものを使っている時は他傷行動がほとんど見られなかった。



(写真) 毛布を指さして要求

・自分からコミュニケーションボードを取ることが少ないので、車椅子の天板にミニボードを貼った。見えるところにあるので、自分から欲しい物を指差すことが増えた。

・ボードをiPadの「ドロップトーク」に移行し、トントンと要求をしたときにiPadを渡すようにした。iPadを使っても同じように要求ができた。



(写真) 予定を変更して休憩をする

実践②—②適切な方法での関わり方

○一斉授業での様子

・本人が欲しい物を教師が持っているとき優しく人をトントンと叩いて呼びようになった。

・自己刺激行動をした時は「どうしたの？」と声をかけ、ボードを見せると「ぐにゅぐにゅボール」「休憩」のカードを指差すようになった。

・車椅子の天板に小さい要求ボードを貼ると、自分からトントンと叩いて呼び、ボードを指差すことが増えた。

・要求したものを使用している時は他傷することはほとんどない。



(写真) 先生の肩に優しく叩いて呼び

○自由時間での様子

・iPadで呼んでも教師が遠くにいる時に、手を挙げたり、声を出したりするようになった。

・絵本を読んで欲しい時に、来て欲しい教師の方を見て、手招きするようになった。



(写真) 手を挙げて呼び

→今までは、気付いてもらえないと諦めたり、強引に欲しいものを取ろうとしたりしていたが、身振りや発声で人と関わることが増えた。

iPadがない時や使えない時の適切な注意獲得の方法を理解してきている。

・iPadの「ドロップトーク」を使っての要求方法が増えた。担任の教師がいない時に「〇〇先生」と他の教師の写真をタップして呼びようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

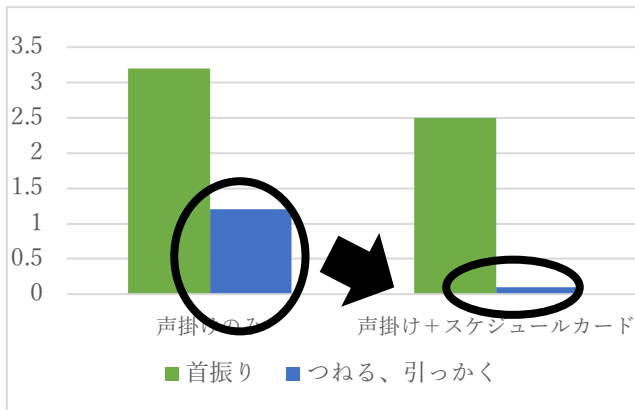
○主観的な気づき

- ①写真やイラスト等の視覚的な提示することで、理解が深まり、自分から行動することが増えた。
- ②iPad やコミュニケーションブックが近くにいる時も、適切な方法で注意を引くことが増えた。
→拒否をしたり怒ったりすることはあるが、授業中の他傷的な注意喚起が減少した。

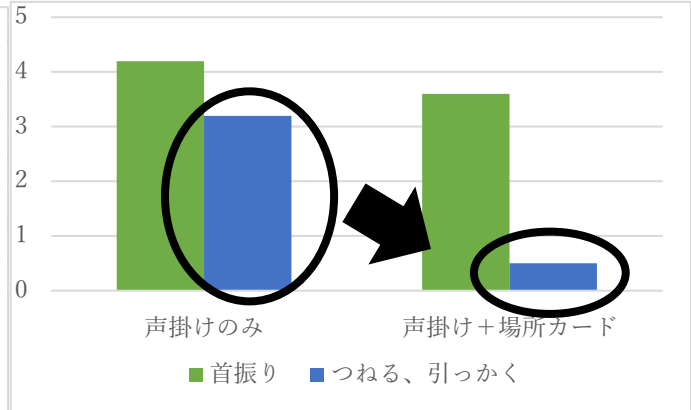
○エビデンス

- ①写真やイラスト等の視覚的な提示することで、教師からの発信が「分かる」ようになり、自分から行動することが増えた。

【図1】机上学習で拒否が見られた時の行動の変化



【図2】ウォーカーで歩行中で拒否が見られた時の行動の変化



写真を提示することで他傷行動が減少した！

スケジュールを提示することで他傷行動が減少した！

- (グラフ緑) 活動に対して首を振って拒否を示す回数はあまり変わらないが、
- (グラフ青) 他傷行動が減少した。

活動に対して、Fくんは首を振って「これは嫌だ」と明確な意思を持っているようである(グラフ緑)。しかし、教師からの発信を「見て」分かるように「伝える」ことを丁寧に繰り返すと、彼は他傷行動をせず、納得をして指示を聞いたり行動をすることが分かった(グラフ青)。

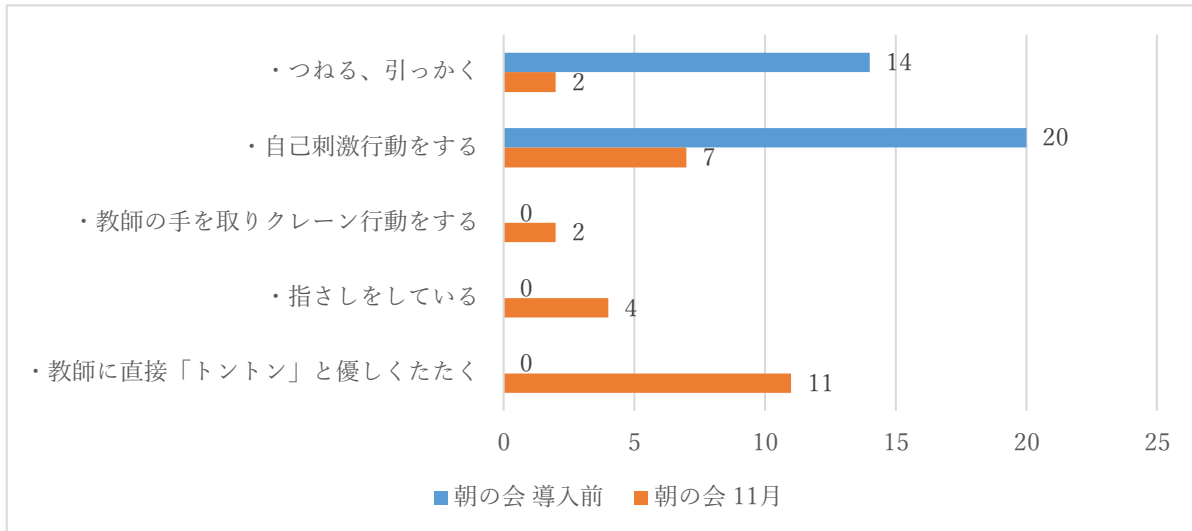
【気づきと考察】

絵本やDVDなど「見て」遊ぶことが大好きなFくんにとって、「安心して過ごせる環境」というのは、次の予定や先生の言葉を「見て」分かる支援が必要であった。スケジュールボードや次の場所を示すカード、タイムタイマーで時間の終わりを示したりしながら、教師が一つ一つFくんが理解しているのか確認すると、Fくんは納得して取り組むことが増えた。また、自分から活動に取り組んだり、片付けをしたりする行動が増えた。(P4の事後の変化を参照)

今までは「次はこれだよ」「終わりだよ」と急に言われても、Fくんの中では理解ができておらず、「なんで！」とパニックになったり怒ったりしまっていたことが今までたくさんあったと思われる。彼にとって他傷行動は「なんで」「どうして」「嫌だ」という意味があったと思われるが、教師からの発信が伝わるように「見て」分かる支援を加えることで、結果的に他傷行動の減少に繋がったと考える(図1、2)。

② iPad やコミュニケーションブックが近くにない時も、適切な方法で注意を引くことが増えた。

【図3】一斉授業（朝の会）での他傷行動と要求行動の変化



朝の会での要求行動のバリエーションの増加した！

【気づきと考察】

授業中や休み時間以外の時も「人に伝えるとこんなことができるんだ」ということを身につけ始めている。今までは、学校生活の中でつまらないことがあるとつねったり、自己刺激行動をして自分の感覚を楽しんでいた。実践を行う中で「欲しいものがあるんだよ」と授業中であっても、コミュニケーションボードやiPadを使って、教師に要求することができるようになった（図3）。

また、F くんに対する関わり方と対応の仕方（P4の表3）を学年職員の教師で共有して実践していくと、これらの行動（詳細はP5の事後の変化を参照）は増加していった。F くん周りの大人達が温かく見守り、彼からの発信を受け止めていくことを積み重ねることで、このように今回の実践で彼からの発信を支えることができた。よって、F くんにとって落ち着いて安心して過ごせる環境になってきていると思われる。

○その他エピソード

・教師とのやり取りのバリエーションが増えた。教師が声かけや指示をすると、教師→F くんに使っているスケジュールボードやカードをF くんが自分から手に取って、気持ちを伝えようとするようになった。教師→F くん、F くん→教師、とお互いのコミュニケーションの道具としてツールとして使えるようになった。例えば、スケジュールボードの「絵本」「給食」を指さしたり、終わったスケジュールのカードを取り出して、「これが見たい。」と、気持ちを伝える姿も見られた。

・つねる引っかくなどの他傷行動が減ったので、周りの人が関わりやすくなった。他傷行動→止められたり怒られたりする、という構図も変わり、F くん主張や意思を読み取ろうとする周りの環境が整ってきている。また、今まではF くと関わりの深い人しか要求を読み取れなかったが、カードやシンボルを使って関わりの少ない人でも要求が伝わりやすくなった。

・スケジュールボードの今後の活用について

スケジュールを主体的に選ぶことによって、より本人が納得して意欲的に学校生活に取り組む姿を目指し、朝の準備の時にカード（全15種類）を渡し自由にボードに貼り、教師と確認をしながらスケジュールリングすることに取り組んだ。

- ・1日目の様子…その場にあるカードをただボードに全部貼った。
- ・3日目の様子…「絵本」「DVD」カードのみを貼って、絵本が入っているカゴを指差して要求する。時間割の内容のカードを教師がこれもしようね～と言いながら一緒に貼っていく。
- ・5日目の様子…「ウォーカー」のカードを教師が貼ると、剥がすというやりとりがあった。「給食」も好きな活動のはずであるが、貼ることはなかった。



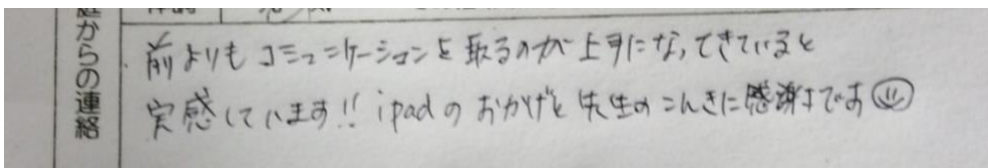
(写真)スケジュールを自分で貼る

←時間の見通しは、「〇〇が終わったら〇〇」などの2つくらいの見通しを持つことができるが、6時間目までの見通しは難しい。授業の時間割を並べても「今何をするのか」という認識なので、先のスケジュールを見通すことは難しい。なので、スケジュールの提示の仕方でもFくんに合った方法を考える必要がある。

【今後の活用方法】

- ・1時間程度のスケジュールをファイルにして、短い時間で提示していく。今から何をするのか分かるようにする。
- ・授業の後にできる好きな活動を選べるようにして（〇〇の授業→△△など）、意欲や見通しがさらに持てるようにする。
- ・スケジュールを持ち運びできるようにiPadに移行し、授業中や移動中でも確認ができるようにする。

- ・家庭でもFくんとのやり取りやあいさつ返事などのコミュニケーションの上達を実感している様子である。



家庭からの連絡帳より

【今後の見通し】

○実践①教師→Fくんへ

- ・スケジュールボードやタイムタイマーなどiPadに移行し、どこでも容易に使えるようにする。

○実践②Fくん→他の人へ

- ・伝え方の質を向上する。

①具体物が目の前にある時に要求をすることが多いので、iPadやコミュニケーションボードを「要求→気持ち」を伝える。」などの複雑化した方法もできるようにする。

②具体的に伝えるために二語文で伝えることができるようにする。

○家庭や放課後等デイサービス事業所と連携し、コミュニケーションができる時間、場所、人を増やす。